

症例アブストラクト

ベンゾジアゼピン多剤併用から抑肝散に置換し不安・不眠が軽快した白血病の1症例

西本武史^a 高野智早^a 高井美穂子^b 小坂浩隆^{a,c}

^a 福井大学医学部附属病院 緩和ケアチーム ^b 同 血液内科

^c 福井大学 子どものこころの発達研究センター

福井大学医学部附属病院 がん診療推進センター

〒910-1193 福井県吉田郡永平寺町松岡下合月 23-3

電話：0776-61-8363 FAX：0776-61-813

takefumi@u-fukui.ac.jp

症例：72歳，女性。

主訴：いろいろなことが頭に浮かんできて眠れない。

現症：身長146cm。体重34.5kg。やせ形。体力は低下。元来、神経質で腹力は弱い。

現病歴：更年期障害のため50代で保育士の仕事を辞めた頃から、クロチアゼパム20mg/日、アルプラゾラム0.8mg/日を内服していた。X年9月、かかりつけ医で汎血球減少を指摘され、当院血液内科にて急性骨髄性白血病と診断。入院の上、化学療法を行ったが、2度の寛解導入療法でも寛解に至らなかった。X年11月、2度目のnadir期から将来への不安が増大し、クロチアゼパムを30mg/日に増やし、さらにブロチゾラム0.25mg/日、ゾルピデム5mg/日を追加したが、中途覚醒頻回なため緩和ケアチームコンサルトとなった。

治療経過：診察時、多弁で非常にイライラしており、自身の将来や家族の今後への不安をまとまりなく訴えた。ベンゾジアゼピン(BZD)多量内服による脱抑制状態であると考え、ブロチゾラム、ゾルピデムの中止し、クロチアゼパムを20mgへ減量、抑肝散(TJ-54)7.5g/日を開始した。処方変更した翌日より、久しぶりに「5時間ほど寝られた」と笑顔がみられ、「いろいろ考えても仕方がない」との発言も聞かれた。X年12月、nadir期を脱し、娘の住む関西地方の病院へ転院となった。BZDの増量は認めていない。

考察：BZD多剤併用が増長した悪性腫瘍に伴う不眠・不安に抑肝散が奏功した症例である。抑肝散は、小児の癇癪や夜泣きに用いられてきた漢方薬であるが、昨今では認知症の行動・心理症状への治療薬として注目を集めている。薬理学的機序として、抑肝散を構成する7つの生薬のうち釣藤鈎がセロトニン1A受容体の部分作動薬として働くことが培養細胞・動物実験から示され、この作用が攻撃性や興奮を改善することで抗不安作用を示すと考えられている。悪性腫瘍患者では不安・抑うつを併発することが多く、BZDが漫然と投与されているケースがしばしばみられるが、本症例はそういった症例に薬理学的相互作用が少ないとされる抑肝散が有効である可能性を示唆している。